

Hello! FUJISEI

No. 186

わが国の平均寿命は世界でも最高水準となっています。高齢期は今や誰もが迎えると言ってよい時代となり、また、高齢者となってからの人生も長いものとなっています。この長い高齢期をどのように過ごすのかは、個人にとっても社会にとっても極めて大きな課題です。

超高齢社会の日本では、介護が大きな問題となっています。年老いた人が年老いた家族の介護をする「老老介護」が常態化し、介護のために仕事を辞めたり、介護疲れによる痛ましい事件も伝えられています。介護問題は、切実な問題です。

(公財)生命保険文化センターが3年に1回実施している「平成25年度生活保障に関する調査(速報版)」から、「介護」に関する意識を見てみましょう。

自分が将来要介護状態になった場合の不安の有無をみると、「不安感あり」は90.0%、「不安感なし」は7.4%となっています。

「不安感あり」とした人の具体的な不安の内容をみると、「家族の肉体的・精神的負担」が64.9%と最も高く、以下「公的介護保険だけでは不十分」「家族の経済的負担」「介護サービスの費用がわからない」の順でした。

介護に対する不安

肉体的・精神的、経済的 家族の負担が心配だ

また、将来親や親族などを介護する立場になった場合の不安の有無は、「不安感あり」82.1%で、自分の介護に対する不安ありと答えた割合を7.9ポイント下回っています。

親などを介護する場合の具体的な不安の内容は、「自分の肉体的・精神的負担」が65.3%と最も高く、以下「自分の時間が拘束される」(51.5%)、「公的介護保険だけでは不十分」(51.1%)、「自分の経済的負

担」(50.3%)の順となっています。自分の介護に対する不安の内容と比べると、「介護の人手が不足する(介護してくれる家族がない)」「介護がいつまで続くかわからない」「自分の時間が拘束される(家族の時間を拘束する)」が特に高く、介護の担い手や時間的要素の不安意識が高くなる傾向がみられます。逆に、「公的介護保険だけでは不十分」は不安意識が低くなっています。

自分の介護に対する不安の内容 (複数回答、%)

